

天皇杯・農林水産大臣賞受賞

88 のアイデア実現を目指して、「え〜ひだ」を創るカンパニー

かぶしきがいしゃ

受賞者 えーひだカンパニー株式会社

やすぎ し ひろせちよう
(島根県安来市広瀬町)

■ 地域の沿革と概要

安来市は島根県の東部、鳥取県との県境に位置し、平成 16 年 10 月、安来市と広瀬町と伯太町が合併して誕生した。面積は約 421km²

(東西距離約 22km、南北距離約 28km)、人口は 35,291 人(令和 6 年 9 月末現在)である。当市の特徴としては、南部は中国山地に連なる豊かな緑に覆われ、そこを源流として中海に注ぐ飯梨川・伯太川全流域が市域に含まれる。下流域に形成された三角州には能義平野が広がり、上流域には豊かな森林と県東部の水瓶としての機能も果たす布部ダム・山佐ダムがある。

第 1 図 位置図



戦国時代には富田城(広瀬町富田)を居城とする尼子氏が、陰陽 11 州(現在の山口県を除く中国地方 4 県と兵庫県南西部)に勢力を及ぼすまでに台頭し、当地域は山陰の文化・経済の中心地として栄えた。

■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

比田地区は安来市の最南部、市中心部から 35km 離れた標高 300~450m ほどの盆地に集落が位置している。

この地は、古くから良質の砂鉄が採れ、製鉄が盛んに行われ、野だたらなどの古代製鉄の跡が数多くあり、製鉄の神を祀る全国 1,200 社の総本山金屋子神社、安来市指定の無形文化財比田踊りなど多彩な歴史・文化が継承される地域でもある。

地域は西比田、梶福留、東比田の 3 地区に大別され、良質米が生産される稲作を中心とし、鉄の運搬や

第 1 表 地区の概要

事 項	内 容
地区の規模	旧村単位
組織の性格	農村型地域運営組織
人口等	総人口 906人 総世帯数 392戸
農業経営体数 (内訳)	農業経営体数 218経営体 個人経営体数 207経営体 団体経営体数 11経営体 (内、法人経営体数) 1経営体
農用地の状況 (内訳)	総土地面積 5,524ha 耕地面積 209ha 田 193ha 畑 16ha 耕地率 3.8% 一経営体当たり耕地面積 1.0ha

農耕用の役牛を起源として改良を重ねた和牛生産、施設花き、施設メロン等の生産が行われてきたが、高齢化による担い手の減少等により農業生産は縮小している。

地域全体でも平成 17 年（2005 年）には人口 1,402 人であったが、令和 6 年 4 月 30 日現在、人口 906 人と人口減少、高齢化が進んでおり、小中学校の統廃合や商業施設の減少など様々な影響が出てきている。



写真 1 比田地区

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

ア 「えーひだカンパニー」以前の取組

比田地区では、東比田地区においては「東比田振興協議会」、西比田地区においては自治会組織が地域活動の主体となり、地域課題に関する話し合いや課題解決に向けた具体的な取組が行われていた。

平成 14 年（2002 年）に両地区にあった小学校（東比田小学校と西比田小学校）の統廃合の話が浮上し、地域住民の間で地域の将来についての不安、危機感が出てきた。

比田地域の今後のための新たな取組を考える中で、地元在住の市議会議員や市職員が中心となって検討が繰り返され、地域の特産品づくりや人材活用のため、地域の産品、加工品を販売する直売所（交流施設）を設置する構想がまとまり、平成 15 年に運営主体となる「いきいき比田の里管理組合」を設立、あわせて地域の女性達をメンバーとする「比田いきいき加工部会」が発足した。

平成 16 年には拠点施設「比田いきいき交流館」が市の地方債事業により完成。「比田いきいき管理組合」が指定管理者となり直売所等を運営するとともに、「比田いきいき加工部会」は端午の節句の伝統食である「笹巻き」の加工を行って好評を博し、全国へ発送するようになった。

イ 新たな地域ビジョン策定の取組

「比田いきいき交流館」の完成から約 10 年が経過し、この間、地域産品や加工品の生産・販売等で一定の成果があったものの、人口減少や高齢化は年々進んでいた。

こうした状況を見て、最初の取組を主導した世代の次の世代、若手の市職員や住民が「このままでは比田がなくなる」という危機感を持ち、「地域外に出た同世代の仲間が比田へ帰って来られるようにしたい」との思いから、取組のベースとなる地域ビジョンづくりの機運が高まった。

平成 26 年 12 月に関係者が集まって顔合わせの会を開催、時を同じくして安来市が地域おこし協力隊制度を活用して比田地区への U・I ターン者の受け入れを行うこととし、最初の協力隊員として農業研修 1 名、地域ビジョン策定の担当者 1 名を配置した。

地域ビジョン策定の主体として有志 25 名と協力隊員 2 名が中心となって、平成 27 年 6 月に「いきいき比田の里活性化プロジェクト」を発足した。当時、県や市において人・農地プラン策定を契機とした地域ビジョンの策定を進めており、関係機関の助言や「水田農

業モデル実践支援事業（県）、がんばる地域づくり応援事業（市）」を活用して、先進地視察やアンケート、ワークショップ等を実施した。

アンケート調査は、世帯主を対象としたものと、全世帯の中学生以上に個人用を配布したが、地域存続に向けた危機意識を背景に回答率は約 90%に達した。ワークショップは小学生、中高生、20～30 代、40～50 代、60 代以上の 5 つの世代毎に「地域の課題、(比田の) いいところ、比田がこうなったらいいな」を共通テーマとして実施。全体ワークショップには全世代 120 名が集まり、保育園児・小学生は絵に描いてアイデアを発表した。



写真2 全体ワークショップ

こうした多くの住民・世代が参加した取り組みにより総数 1469 のアイデアが寄せられ、それを基に平成 28 年 3 月に 88 項目からなる「比田地域ビジョン」が完成した。

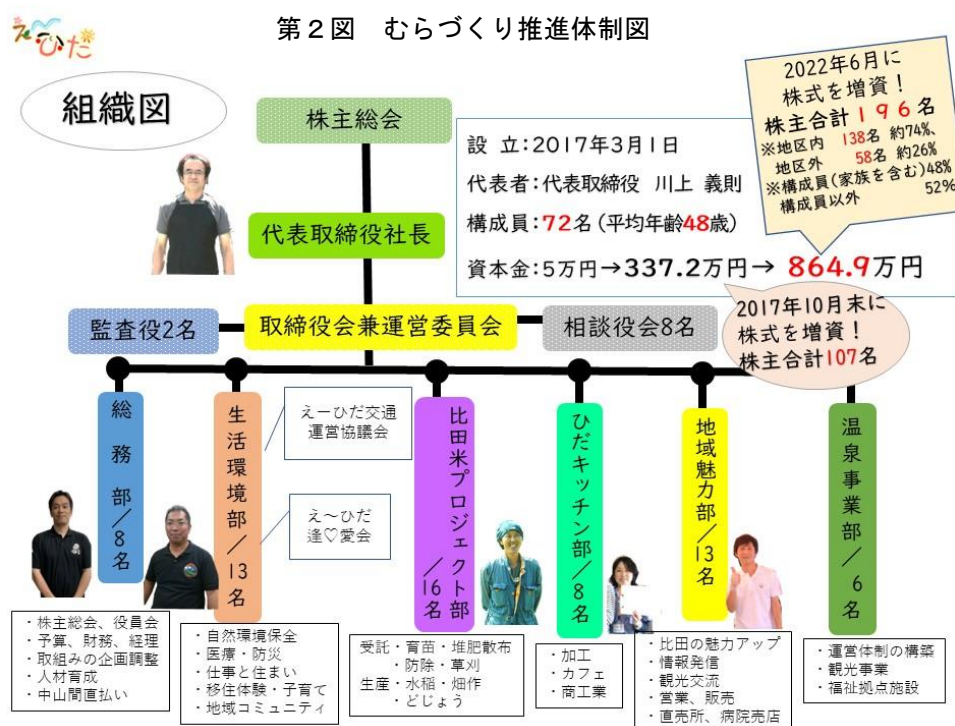
ウ 地域ビジョン具体化の実行組織「えーひだカンパニー株式会社」の設立

88 のビジョンの実現に向けた取組を進めるための組織として、平成 28 年 8 月に任意組織「えーひだカンパニー」を設立して活動をスタートした。

更に今後の事業展開を見据えて法人化を検討し、平成 29 年 3 月に「えーひだカンパニー株式会社（以下、「えーひだカンパニー」と記載）」を設立した。

(2) むらづくりの推進体制

「えーひだカンパニー」は現在、総務部、生活環境部、比田米プロジェクト部、ひだキッチン部、地域魅力部、温泉事業部の 6 部がそれぞれ担当するビジョンの具体化、実現に向けて活動している。



■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

えーひだカンパニーは、自治機能と生産機能の発揮による“地域ビジョン”の実現と「え～ひだ」の創造を理念とし、①自立した地域づくりを計画的に行える仕組み、②ボランティアばかりに頼らない仕組み構築し、農業の他、生活環境、福祉、環境など多岐にわたる分野でビジョン実現に向けた事業を展開している。

そして、従来型の地域運営組織では、公的資金や公的支援を期待した組織を目指しているが、えーひだカンパニーでは、責任を明確にして持続できる組織形態として株式会社を選択し、地域おこし協力隊制度を活用して比田地区へのU・Iターン者の受け入れ、若者や女性が活躍する環境にあることで、持続可能な組織となっている。

第3図 経営理念と行動指針



2. 農業生産面における特徴

(1) 「比田米プロジェクト部」の生産活動による農用地の維持・活用

比田米プロジェクト部は、高齢化等により作付け困難となった農地を中心に、水稻 3.6ha、小麦 1.5ha、そば 1.7ha、牧草 0.7ha、タマネギ 0.25ha を栽培。また、安来市の特産であるどじょうの養殖（5.4a）も開始した。後述する作業受託事業とあわせて地域の農用地の維持・活用に貢献している。

なお、令和6年1月には米で国際水準 GAP「美味しまねゴールド^{注)}」の認証を取得している。

注) 島根県独自の GAP 認証制度である「安全で美味しい島根の県産品認証制度」。令和4年6月に、全国で初めて農林水産省により国際水準 GAP ガイドラインに準拠していることを確認された。



写真3 どじょう養殖

(2) 地域農業を支える作業受託事業

JA しまねやすぎ地区本部が行っていた比田育苗センターでの水稻育苗事業を受託して比田地区の農家へ水稻苗を供給しているほか、ドローンによる農薬散布、堆肥散布、リモコン除草機等による除草作業を作業受託事業として延べ194haの農地で行っており、高齢化が進む地域にあって、個別農家の営農を支える役割を担っている。



写真4 ドローンによる防除

(3) 地域の農産物を活用した多彩な商品開発

最も生産が多い米については、比田地区で生産される良質米を「比田米」としてブランド化、直売所「え～ひだ市場」や県内米穀店などで販売している。

また、島根県育成酒米品種「縁の舞（えにしのまい）」を比田米プロジェクト部が生産して市内の酒蔵で日本酒・焼酎を醸造し、純米吟醸「たたら風」、純米吟醸「たたら舞」、粕取り焼酎「たたら雪」、他には「え～ひだ市場」のリニューアルに合わせて比田米「米ビール」も発売した。

比田産小麦では、市内外の事業者とのコラボにより「クッキー」、「たたらラーメン」、「比田し中華（冷やし中華）」を開発。他に比田産そばで「たたらそば」、比田産大麦で「丸粒麦茶」、比田産柚子で「柚子紅茶」などを商品化している。

また、直売所併設の「え～ひだカフェ」でも、比田産ブルーベリー、れんこんなどを使ったソフトクリームや比田産玄米粉・小麦粉を使ったクレープ、市内にある島根県立情報科学高等学校提案の玄米甘酒チーズケーキなどをメニュー化している。



写真5 開発商品

(4) え～ひだ市場の設置・運営

「比田いきいき交流館」の増改築にあわせて直売所にカフェを併設した「え～ひだ市場」としてリニューアルオープンし、比田地域で生産される商品の販売場所として運営。農家の身近な販売場所となるとともに地域住民の交流の場ともなっている。また、15kmほど離れた旧広瀬町中心部にある安来市立病院内にアンテナショップ「え～ひだshop smile」を開設し、病院利用者からも喜ばれている。



写真6 え～ひだ市場・え～ひだカフェ、スタッフの皆さん

(5) 新たな担い手の確保

安来市が地域おこし協力隊を活用したU・Iターン人材の確保に取り組み、これまでに比田地区で7名を受け入れている。また、地域人口の急減に対処するための特定地域づくり事業の推進に関する法律（令和2年6月4日施行）に基づき、令和3年1月19日に県内3番目に設立された「安来市特定地域づくり事業協同組合」に設立当初から参加し、これまで2名の地域づくりパートナーを受け入れている。これらの制度を活用して受け入れた新たな担い手が「比田地域ビジョン」の策定からその後の具体化に向けた取り組みの過程においても活躍しており、生産面のみならず地域の担い手の確保に結びついている。

(6) 中山間地域等直接支払制度の取り組み強化

比田地区では中山間地域等直接支払制度に18集落協定が参加していたが、担い手の高齢化等により農地の維持管理や協定事務の担い手確保が問題となり、集落協定の継続が危ぶまれる集落も出てきた。

平成28年12月に、各集落協定に対して協定の広域化・統合と、協定に参加して直払事務を担い、加算措置を活用するといった提案を行った結果、平成29年から13集落の賛同を得て4集落協定に統合・広域化し、えーひだカンパニーが協定参加者として参画して事務と加算要件の取り組みを担うことで、農産物の販路拡大や加工など旧協定では取り組めなかった新たな取組を実施。また、えーひだカンパニーとしても交付金により安定した財源を確保することができている。

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) デマンド交通事業

アンケート回答の中でも、通勤・通学や通院、買い物の不便さを指摘する声が多く、地域ビジョンの一つに「通院や買い物サポートのデマンドバス」事業を掲げ、その実現に向けて平成30年に設立された「えーひだ交通運営協議会」が比田地区全域でデマンド交通を運行し、「生活環境部」が支援している。令和5年度には1,045人が利用している。



写真7 デマンド交通

(2) 買い物弱者対策としての移動販売の実施

地域で生活する上で不可欠な買い物環境が悪化しており、地域ビジョンにも「比田ぐるり移動販売車」が盛り込まれたことから、令和5年2月から高齢者の買い物等生活支援、見守りをおこなって移動販売車「ひだまり号」を運行。週3日、3つのルートで地区内を回り、生鮮品、総菜、パン、お菓子、日用品等約300品目を販売。令和6年3月時点で81世帯が利用している。



写真8 ひだまり号での移動販売

(3) 将来の比田を担う人材育成 「え〜ひだ Kids 支援」

「比田地域ビジョン」には子どもたちのアイデアが入っているが、その後も小学校5・6年生の授業の中で比田地区の活性化と人口増に向けた検討・提案を行った。

子どもたちの提案を実現させていくための方策について小学校教諭と協議を重ね、平成30年4月に小学校との協働事業「サマーフェスタ出店プロジェクト」がスタートし、「え〜ひだ Kids」を立ち上げた。授業の中でサマーフェスタ出店の準備を重ね、同年7月のサマーフェスタに出店した。

これを契機に「比田米消費拡大プロジェクト（比田米を使っておやきや米粉ピザ等の商品を開発）」、「サマーフェスタPRプロジェクト」、「え〜ひだ市場PRプロジェクト」といった取り組みを継続している。

これらの取り組みは「え〜ひだカンパニー」との協働事業として子どもたちが出店や商品開発、動画制作などに直接携わることで、地域の活性化に自分たちが関わることができるという自信や意欲、ひいては生まれ育った比田への郷土愛の醸成にもつながっており、将来の比田を担う人材育成にも貢献するものと期待されている。



写真9 サマーフェスタ出店の様子

(4) 子育てサポート「地域から出産おめでとう祝い」事業

生活環境部が取り組む「地域から出産おめでとう祝い」事業は、比田地区内の子どもが生まれた家庭に、町内のお店や事業所から提供を受けた紙おむつや商品券などをプレゼントするというもの。行政主導ではなく、地域全体で子育てをサポートする取組で子育てを応援する雰囲気づくりにも役立っている。



写真10 出産おめでとう！

(5) 温泉施設「湯田山荘」の運営と冬期一時居住の取組

比田地区にある温泉施設「湯田山荘」は、地域住民のふれあいの場であるとともに、地区外からの誘客施設としての役割も果たしていたが、経営体制の見直しの検討等、将来が危ぶまれる中で、比田観光協会等の関係団体が存続に向けた方策の検討、市との話し合いを重ねた結果、新たに「温泉事業部（＝100%出資の子会社「え〜ひだドリーム株式会社」）を令和4年7月に立ち上げ、安来市からの指定管理を受け、施設の改装後の令和6年1月に「湯田山荘」の営業を開始した。

また、令和6年1月から2月まで冬期の除雪作業が困難な高齢者の冬期一時居住の試行を実施し、6名が滞在した。

「癒し」と「健康増進」を基本に「気取らずくつろぐ第2のおうち」を目指し、地域の特性を活かした「体験型サービス」の提供や地域における福祉事業の拠点となるべく取組を進め、今後の収益事業の一つとすることを目指している。



写真11 改装した湯田山荘